

令和 2 年 5 月 28 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2019

課題番号：26284119

研究課題名(和文) 弥生時代海人集団に関わる学際的研究

研究課題名(英文) The Interdisciplinary research of groups who work in the sea in YAYOI era.

研究代表者

杉山 浩平 (Sugiyama, Cohe)

東京大学・大学院総合文化研究科・特任研究員

研究者番号：60588226

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、弥生時代に海を生業の舞台とした集団を「弥生海人集団」と定義して、その解明のために神奈川県三浦市に所在する白石洞穴遺跡の考古学的発掘調査を学際的組織により行ってきた。その結果、弥生時代の貝塚層、古墳時代から古代の埋葬墓を複数検出することができた。弥生時代の貝塚では多くの食糧残渣(小型巻貝やサザエ・アワビ)が出土し、遠隔地との交易とともに地場産の海産資源も積極的に獲得し、農耕集団との交易をおこなっていたものと推定される。また、洞穴内には、複数回流入した津波堆積物が極めて良好な状態で保存されていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

弥生時代は農耕の時代として捉える傾向がある。しかし、本研究により海での生業活動が、弥生時代においても非常に重要な位置を占めていることが明らかになった。こうした研究成果は弥生時代を多角的理解につながると考えられる。また、洞穴内で発見された複数の津波堆積物は、日本で初めての発見例であり、洞穴利用の考古学的見地のみならず、地震学の面からも非常に重要な発見であったと言える。

研究成果の概要(英文)：In this study, I defined the group who work in the sea in Yayoi period. I performed the archeological excavation of the remains of Shiraishi cave located in Miura city, Kanazawa prefecture for the elucidation by an interdisciplinary organization. As a result, it was able to find tombs (from Kofun period to Heian period) and the shell mounds (Yayoi period and Kofun period). Much food leftovers (small conchs, turban shells and abalones) are excavated in the shell mound of the Yayoi period. Therefore, I thought they crossed the sea for trades and got the marine products resources of the local beach. So after, they exchanged (or traded) it with the farming group. In addition, in the cave, it was revealed that the tsunami sediment which flowed in several times was stored in an excellent state.

研究分野：考古学

キーワード：弥生時代 海蝕洞穴遺跡 海人 先史時代のアワビ漁 古墳時代の埋葬施設 津波堆積物

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

近年の弥生文化の生業研究が進み、水田稲作だけでなく雑穀栽培を含めた複合的生業体系が採られていたことが明らかになりつつある。これは弥生文化の多角的理解へと結びつく。しかし、この視点でも未だ不十分であると言わざるを得ない。それは、弥生文化の多様性を認める研究が、あくまでの陸の農耕民の姿を明らかにしたに過ぎないためである。この20年で調査例が増えた弥生時代の低湿地遺跡の様相をみれば、大量に出土する骨角器・魚骨など漁撈活動が盛んに行われていたことが明らかである。本研究では、海に生業の場を求めた人々とその集団を学際的に研究し、弥生文化の複雑性の新しいモデルの提示を企図している。海に生きるとは、船をこぐ力・潮を読む力・潜る力であり、決して農耕民には対応することができない特殊な技能と能力が要求される。そうした能力を持ち合わせた人々を本研究では弥生海人集団と呼ぶ。

研究代表者の杉山は、2007年から2012年まで三菱財団の研究助成金(研究課題:伊豆諸島先史時代遺跡の研究・考古学と火山学の学際的調査-)にて伊豆諸島の三宅島にて考古学・火山学・文化財科学・先史人類学の各研究者とともに弥生時代前期・中期・後期の3カ所の遺跡を調査した。なかでもココマ遺跡(弥生時代中期から後期)の調査では、0.35 m²、土量にして0.1立米の貝塚層をすべて水洗選別法で資料を回収する調査を行った。その結果、ココマ遺跡ではオオツタノハ貝を用いた貝輪の製作が行われていたことが明らかとなった。貝輪は、縄文時代の遺跡からの出土が多く確認されていたため、弥生時代の遺跡から出土する事例は、「縄文文化からの伝統やその影響の残存」としてしか評価されてこなかった。しかし、ココマ遺跡は直近にオオツタノハ貝の生息地があり、大量に貝を捕獲して遺跡内で加工していることから、原産地直下の貝輪製作遺跡と言え、弥生時代に出現する磨製石器の原産地製作遺跡のありかたと非常に類似していた。また、オオツタノハ貝製貝輪のみならず、黒曜石製石器についても分析の結果、三宅島の大里遺跡で大量に加工されており、大里遺跡は南関東地方への流通を目的とした黒曜石の原産地遺跡であることも明らかになった。これらの遺跡の分析を通じて、貝輪や黒曜石などの縄文時代以来の物資の流通は、縄文文化からの伝統を引き継いでいるのではなく、弥生文化として物資をめぐる行為そのものが変化(変容)していることを指摘した(杉山2010, 杉山2014)。(図1)



図1 弥生時代の三浦半島と伊豆諸島の航海

こうした海の物資の流通に携わった集団とは、どのような集団であったのか。この点を明らかにするため本研究では、三浦半島に所在する海蝕洞穴遺跡の調査・研究を行いたいと考える。それではなぜ、三浦半島の海蝕洞穴遺跡なのか? 弥生時代の伊豆諸島に渡航した集団は、島に永続的に居住してきた集団ではなく、駿河湾沿岸から東京湾沿岸に至るいずれかの地域を故地としていることが、島出土の弥生土器の胎土分析からすでに明らかになっている。また、本土でのオオツタノハ製貝輪の未成品の出土例は極めて少ないが、それらは三浦半島の海蝕洞穴遺跡に集中している。三浦半島の海蝕洞穴遺跡は、1950年代から発掘調査が行われ、その性格について漁民の生活の場や台地上の農耕集落からの分村などと考えられてきた。しかし、その機能・性格については明らかとなっていない。そうしたなかで、伊豆諸島との交流の視点から海蝕洞穴遺跡を再評価し、弥生海人集団を明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究課題では弥生海人集団を分析する上で、3つの研究テーマを掲げている(図2)。テーマ1は、発掘調査による洞穴空間の利用とその生活形態の研究である。洞穴遺跡の調査を通じて考古学的方法により文化環境を、そして貝類学や花粉学的方法により古自然環境を検討する。掘削土壌を徹底して水洗選別する事により、通常の見落としで微小遺物のサンプリングを行うことで目的を達成することができる。

テーマ2は、海蝕洞穴遺跡を利用した集団の交流ネットワークに関する研究である。文化財学的手法を用いて、発掘を行う洞穴遺跡の出土土器や周辺の既調査済みの洞穴遺跡の出土土器、台地上の遺跡から出土した弥生土器の胎土分析を定量的に行い、移動・越境する弥生土器の分布から空間的な海人集団の交流ネットワークについて研究する。

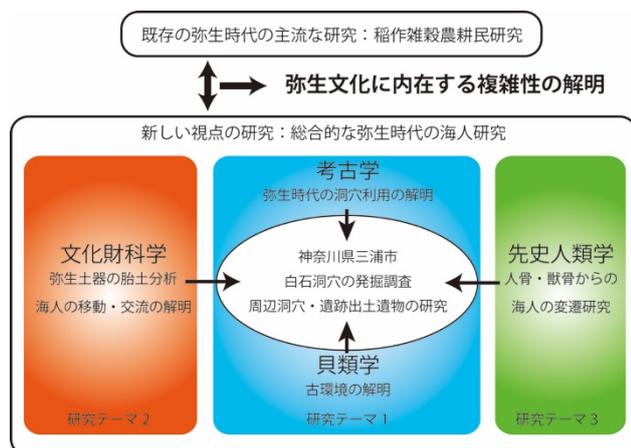


図2 研究の概念図

テーマ 3 は海蝕洞穴を利用したヒトの時系的形質的特徴・食性変化・出土獣骨の分析と併せた人間と動物との関わりに関する研究である。先史人類学・文化財科学的手法を用いて発掘を行う洞穴遺跡ならびに三浦半島に所在する海蝕洞穴出土の人骨を分析対象とすることで目的を達成することができる。海蝕洞穴では、弥生時代だけでなく、古墳時代の人骨も多く出土しており、時系の変化を追うことができる。

3. 研究の方法

本研究課題は考古学・先史人類学・文化財科学・貝類学の学際的組織により複眼的な視点から行うものである。テーマ1 の海蝕洞穴遺跡の調査は、神奈川県三浦市に所在する白石洞穴遺跡の発掘を行う（図3）。平成26年度から各年4~6 m²の面積を掘削する。電動篩等を調査地に持ち込み、すべての掘削土を水洗選別し徹底した資料の採集を行う。併せて、テーマ2 は三浦半島・相模湾沿岸・駿河湾沿岸・房総半島南部の遺跡出土の弥生土器の胎土分析を行う。テーマ3 は平成26年度から三浦半島の海蝕洞穴遺跡出土の人骨の調査・分析を行う。

本研究課題では、海蝕洞穴遺跡を対象として弥生時代の海人集団の解明を行うため、考古学のみならず、自然科学・文化財科学の研究者が研究分担者として参画する。三浦半島の海蝕洞穴遺跡は、戦後から地元考古学研究団体である横須賀考古学会が数多くの調査研究を行ってきた。今回発掘する海蝕洞穴遺跡の資料を研究するためには、周辺洞穴の資料との比較が不可欠である。横須賀考古学会と研究の打ち合わせの

中で、これまでの調査経験から考古学的課題について多くの示唆をいただいた。提示された問題点は、研究者代表者の杉山が伊豆諸島の調査から導き出した問題点と異なるところもあり、弥生時代の海人集団を研究する上では、欠かすことのできない課題として認識した。そこで、テーマ1の本発掘調査については、横須賀考古学会のメンバーにも研究協力者として参画していただき、共同研究という形ですすめていきたいと考えている。横須賀考古学会と共同研究という形を採ることで、数多くの洞穴調査経験を有する方々に調査について多くのご教示をいただけるであろう。

4. 研究成果

本研究では課題解決のために、神奈川県三浦市に所在する海蝕洞穴遺跡（白石洞穴遺跡）を主な研究対象地として発掘調査を行い、次にあげる2つの成果を上げることができた（図4）。1つは弥生時代から古代にかけての累積した人類の活動史を明らかにすることができた点である（成果1）。そして、もう1つは閉鎖された洞穴内部の空間に津波堆積物が良好な状態で保存されていることがわかり、新たな研究分野の開拓の必要性を示すことができた点である（成果2）。

成果1では、白石洞穴遺跡にて考古学的発掘調査をおこなったところ、弥生時代中期から古墳時代中期前半の貝塚、古墳時代後期から古代の石囲い墓、中世の集石遺構が検出された。発掘調査では、原則、土器や石器・人骨資料を出土位置を全点記録し、古代以前の堆積土は、現地にて目幅が4mmないしは1mmの篩を用いた選別（古代から古墳後期の堆積層は乾式と水洗の併用、古墳時代中期以前の堆積層については水洗）をおこない、これまでの洞穴調査にはない精度で記録と資料の回収をおこなうことができた。

研究期間の前半期（2014年~2017年）においては、古代から古墳時代の石囲い墓が3基検出された。墓の周りには、多くの散乱骨



図3 発掘調査前の白石洞穴遺跡



図4 白石洞穴遺跡の発掘調査風景



図5 古墳時代から古代の人骨出土状況

が確認され、検出された墓数以上の人骨が追葬されたと想定される。墓からは土師器・須恵器のほか、玉類が多く検出された。出土人骨は、その多くが非常に軟化し、破片化しているものも多いため、現在においても形質学的分析と自然科学的分析（年代測定と食性分析）を行っている。いままでに明らかになった範囲では、人骨は幼児から壮年まで多岐にわたる（図5）。また、食性分析では、本研究において、発掘調査で出土した人骨のほかに、東京大学総合研究博物館や横須賀市自然・人文博物館所蔵の縄文時代から古墳時代までの人骨資料の分析も併せておこなった。その結果、弥生時代を境として人骨に見られる食性のバリエーションの幅が狭くなっていくことが明らかになった（佐宗 2017, 米田 2017, 米田・佐宗・杉山 2018）。今後、出土人骨の更なる分析を進めていくことで、度重なり洞穴内で行われた埋葬の構造的解明が期待される。



図6 弥生時代のアワビ殻の出土状況

この結果、弥生時代を境として人骨に見られる食性のバリエーションの幅が狭くなっていくことが明らかになった（佐宗 2017, 米田 2017, 米田・佐宗・杉山 2018）。今後、出土人骨の更なる分析を進めていくことで、度重なり洞穴内で行われた埋葬の構造的解明が期待される。

古墳時代中期以前の堆積層は、基本砂質の貝塚層になり、土器のほかに小型巻貝やサザエ・アワビなどが出土した。特にアワビは、白石洞穴を含めて他の海蝕洞穴においても大量に出土していることを今回確認した（図6）。そして、洞穴ごとにアワビの種類と加工方法に違いがあることが明らかになった（高橋・黒住・釘持ほか 2018, 高橋・黒住 2018, 高橋・黒住・釘持ほか 2019）。脊椎動物では、魚類が多く、ほ乳類が少ない傾向をみることができ、他の洞穴と類似した傾向を示した（釘持 2017）。貝製品や骨角器も漁具や装飾品など弥生時代から古墳時代のものが複数検出された（高橋・黒住 2018, 黒住 2018, 高橋 2020）。また、弥生時代の貝層からは骨角器の未成品や製作時に生じる鹿角の破片が出土しており、洞穴内で骨角器の製作が行われていたことが明らかになった（高橋・黒住・釘持ほか 2019）。

ほかに、海蝕洞穴を利用した集団の出自を検討するため、洞穴遺跡ならびに近隣の集落遺跡から出土した土器の胎土分析（蛍光X線分析ならびに鉱物分析）を行った。研究史では海蝕洞穴を利用した集団は、近隣の農耕集落から派生してきた集団であり、両遺跡間に強い関わりがあると考えられてきた。しかし、現段階の分析の結果からは、土器の胎土は異なっており、海蝕洞穴を利用した集団は、農耕集落から土器の提供を受けるような関係には無かったのではないかと考えている（池谷 2017）。

こうした分析から、現段階において弥生時代に三浦半島の海蝕洞穴を利用した集団は、比較的独立性が高く、伊豆諸島への渡航など遠距離交易に従事するとともに、近隣の磯資源の利用も取り入れた生業活動であり、そこには通常の農耕集団では行えない専門的な活動の姿を見ることができると考えられる。そして、その集団は獲得した海産資源ならびに交易で得た資源を用いて、農耕民が生産した食糧資源などと交換していたと考えられる。つまり、こうした面において海人集団は弥生社会のなかで従属的な立場では無く、独立した集団であったのではないかと推定することができる（杉山・小川ほか 2019, 白石・横須賀 2019, 浜田・中山・杉山 2019, 西相模・兵庫 2020）。

成果2は、海蝕洞穴遺跡での発掘調査を行った結果、洞穴内部には津波等の堆積物が非常に良好な状態で堆積していることが国内で初めて明らかになった。堆積物の層位的位置ならびに包含された炭化物の年代測定分析から、複数ある津波起源と推定される堆積物のなかで、もっとも厚い堆積物は、中世の関東地震に伴うものと考えられる（藤原・上本 2018, 藤原・杉山ほか 2018）（図7）。この中世の堆積物の上下には、考古遺物を含む文化層があり、その上下にも、津波堆積物の可能性がある砂・土層が複数確認された。また、周辺で行われた洞穴遺跡やオープンサイトの



図7 洞穴内部の堆積土層（真中の黒い堆積層が中世の津波堆積物）

の遺跡における堆積物について、発行された発掘調査報告書から検討していくと、いくつかの遺跡において、津波堆積物の可能性のある地層が存在し、これまでの調査で見落とされていた可能性が明らかになった。つまり、三浦半島先端部には、過去の歴史的大地震に伴う津波堆積物が堆積している可能性がある。そのなかでも、海蝕洞穴という閉鎖空間においては、後世の開発から逃れることができたため、良好な状態で現在に至るまで地層が保存されている可能性がある。また、津波堆積物の流入という、イベントを契機として、人類の洞穴利用に変化（生産・生業の場

から墓域へなど)、つまり、自然環境の変化と人類活動の変化のリンクの蓋然性について、今後研究を展開することができる可能性も示すことができた。

本研究では、多岐にわたる学術的な成果を示すことができたと同時に、次の解決すべき課題も明らかになった。白石洞穴遺跡の調査も、弥生時代中期の文化層を発掘している途上である。洞穴の形成から埋没までのプロセスの解明とともに、そこに関わる人類の活動の痕跡についても今後追求していきたいと考えている。

また、最後になるが、本研究を遂行する中で、研究初年度から神奈川県三浦市において、研究成果の地域への還元を目的として、サイエンスカフェを開催してきた(図8)。開催回数は、1年に1~2回程度であったが、発掘調査の成果報告や本研究プロジェクトの研究成果などを中心に話題提供を行ってきた。サイエンスカフェの実施に当たっては、共同研究を行っている横須賀考古学会、地元行政である三浦市教育委員会に大変お世話になった。

サイエンスカフェは、開始当初の参加者は20名程度であったが、回数を重ねるごとに増え、直近では40名程度のかたに参加いただけるほど認知されてきた。発掘や研究成果の報告のみならず、出土資料の一部展示なども行い、多くの方に関心を持って頂けた。こうした研究成果の地域への還元も本研究を円滑に実施していく上では非常に重要な活動であった。



図8 Miura サイエンスカフェの風景

<引用文献>

- 池谷信之 2017 「土器の胎土分析が示す弥生人の移動-伊豆諸島から相模湾、三浦半島へ」
第71回 日本人類学会
- 黒住耐二 2018 「タカラガイの利用-主に近現代の土産物-」『民具マンスリー』第51巻
第6・7号
- 剣持輝久 2017 「三浦半島の貝塚出土の動物遺体からみる縄文時代から古墳時代の食料」
第71回 日本人類学会
- 佐宗亜衣子 2017 「三浦半島の貝塚・海蝕洞穴遺跡から出土した人骨
—縄文&弥生時代を中心として」第71回 日本人類学会
- 白石洞穴遺跡学術調査団・横須賀考古学会 2019 『神奈川県三浦市白石洞穴遺跡の発掘調査
2014年~2019年』
- 杉山浩平・小川裕久・池谷信之・黒住耐二・米田穰・上本進二・剣持輝久・佐宗亜衣子・高橋健・
土井翔平・藤原治 2019 「神奈川県三浦市白石同穴の発掘調査 (2014~2018)」
日本考古学協会 第85回総会
- 杉山浩平 2010 「弥生時代における伊豆諸島への戦略的移住の展開」『考古学雑誌』
第94巻 第4号 日本考古学会
- 杉山浩平 2014 『弥生文化と海人』六一書房
- 高橋健 2020 「三浦半島白石洞穴出土の鹿角製杖頭」『動物考古学』37号
- 高橋健・黒住耐二・剣持輝久・中村勉・千葉毅・杉山浩平 2018 「三浦半島弥生時代の
アワビ殻製品の研究」日本考古学協会 第84回総会
- 高橋健・黒住耐二 2018 「白石洞穴遺跡出土貝類と貝製品について」日本第四紀学会 2018年大会
- 高橋健・黒住耐二・剣持輝久・杉山浩平 2019 「三浦半島弥生時代のアワビ殻製品の研究
(その2)」日本考古学協会 第85回総会
- 西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会編 2020 『弥生時代の東西交流 広域的な連動性を
考える』六一書房
- 浜田晋介・中山誠二・杉山浩平 2019 『再考「弥生時代」 農耕・海・集落』雄山閣
- 藤原治・上本進二 2018 「神奈川県白石洞穴遺跡の堆積物中の大波の記録 (関東地震との関連)」
日本第四紀学会 2018年大会
- 藤原治・杉山浩平・上本進二・米田穰 2018 「三浦半島の隆起海食洞から発見された
古代・中世の大波の痕跡」第35回歴史地震研究会
- 米田穰 2017 「三浦半島における食生態の時代変遷」第71回 日本人類学会
- 米田穰・佐宗亜衣子・杉山浩平 2018 「白石洞穴出土遺跡の年代学的検討と古人骨の化学分析」
日本第四紀学会 2018年大会

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高橋健	4. 巻 37
2. 論文標題 三浦半島白石洞穴出土の鹿角製杖頭	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 動物考古学	6. 最初と最後の頁 99・103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉山浩平	4. 巻 467
2. 論文標題 陸の考古学者は水中の文化遺産になにを求めるか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Ocean Newsletter	6. 最初と最後の頁 6・7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 黒住耐二	4. 巻 51（6・7）
2. 論文標題 タカラガイの利用ー主に近現代の土産物ー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 民具マンスリー	6. 最初と最後の頁 10 - 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下尚子・黒住耐二	4. 巻 51（6・7）
2. 論文標題 タカラガイ特集にあたって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 民具マンスリー	6. 最初と最後の頁 1 - 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉山浩平	4. 巻 53
2. 論文標題 三浦半島海蝕洞穴遺跡の空間利用の変遷	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 神奈川考古	6. 最初と最後の頁 13-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉山浩平	4. 巻 53
2. 論文標題 海蝕洞穴遺跡の層位	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 神奈川考古	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉山浩平	4. 巻 1
2. 論文標題 三浦市白石洞穴遺跡を掘ってみた	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 第1回 Miuraサイエンスカフェ 要旨	6. 最初と最後の頁 12-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒住耐二	4. 巻 21
2. 論文標題 化石貝と微小貝からみた資源利用	5. 発行年 2014年
3. 雑誌名 季刊 考古学 別冊	6. 最初と最後の頁 149-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計25件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉山浩平・白石洞穴遺跡調査団・横須賀考古学会
2. 発表標題 三浦市白石洞穴遺跡 相模湾に面した海蝕洞穴遺跡
3. 学会等名 神奈川県考古学会 第42回 遺跡調査研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 土井翔平・杉山浩平
2. 発表標題 白石洞穴遺跡の遺物と遺構
3. 学会等名 日本第四紀学会2018年大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉山浩平
2. 発表標題 海の視点からみた弥生人
3. 学会等名 明治大学博物館友の会 弥生時代研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉山浩平
2. 発表標題 弥生人 島へ渡る 宝を求めて
3. 学会等名 東京都埋蔵文化財センター 第1回文化財講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋健・黒住耐二・釘持輝久・中村勉・千葉毅・杉山浩平
2. 発表標題 三浦半島弥生時代のアワビ殻製品の研究
3. 学会等名 日本考古学協会 2018年度総会研究発表
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉山浩平
2. 発表標題 三浦市白石洞穴遺跡－相模湾に面した海蝕洞穴遺跡－
3. 学会等名 横須賀考古学会 第20回 三浦半島地区遺跡調査発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉山浩平
2. 発表標題 相模湾を眺めていた弥生時代の人々
3. 学会等名 平成30年度かながわの遺跡展 第1回特別講演（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐宗亜衣子・米田穰
2. 発表標題 神奈川県三浦市白石洞穴遺跡出土人骨について
3. 学会等名 日本考古学協会 2018年度総会研究発表
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米田穰・佐宗亜衣子・杉山浩平
2. 発表標題 白石洞穴出土遺跡の年代学的検討と古人骨の化学分析
3. 学会等名 日本第四紀学会2018年大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋健・黒住耐二
2. 発表標題 白石洞穴遺跡出土具類と貝製品について
3. 学会等名 日本第四紀学会2018年大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤原治・上本進二
2. 発表標題 神奈川県白石洞穴遺跡の堆積物中の大波の記録（関東地震との関連）
3. 学会等名 日本第四紀学会2018年大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池谷信之
2. 発表標題 白石洞穴および周辺遺跡出土弥生土器の胎土分析
3. 学会等名 日本第四紀学会2018年大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤原治・杉山浩平・上本進二・米田穰
2. 発表標題 三浦半島の隆起海食洞から発見された古代・中世の大波の痕跡
3. 学会等名 第35回歴史地震研究会(大分大会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉山浩平
2. 発表標題 東日本の地域間交流－太平洋沿岸－
3. 学会等名 西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会合同シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋健
2. 発表標題 白石洞穴の人々が捕ったアワビを語る
3. 学会等名 第5回 Miuraサイエンスカフェ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒住耐二
2. 発表標題 日本先史時代の貝製品 - 三浦半島・白石洞穴出土品の理解に向けて -
3. 学会等名 第5回 Miuraサイエンスカフェ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉山浩平
2. 発表標題 浦半島の先史・原始の墓と人骨 三浦市白石洞穴遺跡の発掘調査を中心として
3. 学会等名 第71回 日本人類学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 池谷信之
2. 発表標題 器の胎土分析が示す弥生人の移動 伊豆諸島から相模湾、三浦半島へ
3. 学会等名 第71回 日本人類学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 劔持輝久
2. 発表標題 浦半島の貝塚出土の動物遺体からみる縄文時代から古墳時代の食料
3. 学会等名 第71回 日本人類学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米田穰
2. 発表標題 浦半島における食生態の時代変遷
3. 学会等名 第71回 日本人類学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐宗亜衣子
2. 発表標題 浦半島の貝塚・海蝕洞穴遺跡から出土した人骨 縄文&弥生時代を中心として
3. 学会等名 第71回 日本人類学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 杉山浩平
2. 発表標題 三浦市 白石遺跡－三浦半島に面した海蝕洞穴遺跡－
3. 学会等名 第19回 三浦半島地区遺跡調査発表会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 杉山浩平
2. 発表標題 白石洞穴遺跡を掘ってみた
3. 学会等名 第3回 Miuraサイエンスカフェ
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 杉山浩平
2. 発表標題 三浦市白石洞穴遺跡を掘ってみた
3. 学会等名 第1回 Miuraサイエンスカフェ
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 杉山浩平
2. 発表標題 三浦市白石洞穴遺跡の調査速報
3. 学会等名 考古学研究会 東京例会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 弥生時代研究ネットワーク	4. 発行年 2014年
2. 出版社 神奈川大会事務局	5. 総ページ数 48
3. 書名 弥生時代研究ネットワーク2014年度交流会 神奈川大会 資料集	

1. 著者名 杉山浩平	4. 発行年 2015年
2. 出版社 六一書房	5. 総ページ数 未定
3. 書名 久ヶ原・弥生町期の現在 - 相模湾/東京湾の弥生後期の様相 - 記録集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	米田 穣 (Yoneda Minoru) (30280712)	東京大学・総合研究博物館・教授 (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	黒住 耐二 (Murozumi Taiji) (80250140)	千葉県立中央博物館・その他部局等・研究員（移行） (82503)	
研究分担者	池谷 信之 (Ikeya Nobuyuki) (80596106)	明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・研究推進員 (32682)	
研究協力者	小川 裕久 (Ogawa Hirohisa)		
研究協力者	劔持 輝久 (Kenmotsu Teruhisa)		
研究協力者	高橋 健 (Takahashi Ken)		
研究協力者	佐宗 亜衣子 (Saso Aiko)		
研究協力者	上本 進二 (Uemoto Shinji)		
研究協力者	藤原 治 (Fujiwara Osamu)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	土井 翔平 (Doi Shouhei)		